

桂園派と真宗佛光寺派の交流・交差
―香川景樹添削随応上人筆当座会記―

田
中

仁

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第10巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.10 / No.2

平成 25 年12月 4 日発行 December 4, 2013

桂園派と真宗佛光寺派の交流・交差

―香川景樹添削随応上人筆当座会記―

* 田中 仁

はじめに

香川景樹の「歌日記」⁽¹⁾は、景樹の歌を、寛政十二年（一八〇〇）十二月二十五日の立春の歌から天保十四年（一八四三）の辞世の歌まで、年次にしたがって配列した編年体の歌集であるが、その中には、景樹自身やその門人、周辺の人々によって催された歌会に出した歌や、諸所に遊んで詠んだ多くの歌が書きとめられている。たとえば、次の例は文化三年（一八〇六）八月十五日、清水寺の善光寺堂（善光寺如来堂）で催された歌会の席上での歌である。

こよひ例の善光寺堂に集ふ行敬 敬勝 幸文 定豪 斧
木 観阿 円雅 伯雅 雅倫九人也月はいと清らにて近
き年頃いと珍らかなれは殊更にめてはやす三十首の組題
各三首つゝよむ

月前雲
白雲は絶間のみにもなりにけり月の光にさへきられつゝ
月前薄
夜をふかみ露やおくらんすむ月の影にもなひく花薄かな
月前杉
谷かけに立てる鉾杉てる月のみかける物になせるよは哉

また、次の例は、文化四年八月八日に東山の真如堂から東北院へと遊んだ際の歌である。

八日夕つかた早川紀成 熊谷直好 木村高敦 菊岡弘充
のぬし達と真如堂の萩にまかりて山つたひとと真如にお
り神樂をかのうしろなる広野の蘭あまたかり
我はけるにふき刀も秋の野の草をかるには猶とかりけり
薄かるかやもかる東北院のまへにいてゝ二たひ真如堂の
まへにいつ舟やに入りて夕いひ食ふ

秋夕に山寺に来たるといふ心をみなよむ

山寺の秋のゆふへそあはれなる入相の鐘うちつけにして
（以下略）

こうした歌会や吟遊に加わった人々の中に、桂園派の歌人として名のある人々と並んで、真宗佛光寺派の僧侶や門徒の名が見られることがしばしばある。右に引いた二つも実はその例であつて、前者においては円雅がそれにあたる。円雅は、越後寺泊の佛光寺派寺院東山聖徳寺の住職である。学僧として知られ、『佛光寺学匠

* 地域学部地域文化学科

寮の伝灯と史料』に、法名「願海院 釈円雅」、庵号「心水閣」、寺院名「新潟・寺泊・聖徳寺」、往生年月日「文政元年七月二十七日」、享年「七十一歳」、副講師就任年月日不詳、文化年間に講師に就任、とある⁽²⁾。

後者においては早川紀成、木村高敦が佛光寺の関係者で、本山佛光寺所蔵『御日記』寛政二年（一七九〇）六月十日に、

一 庄野宿早川嘉十郎次男田蔵事兼而依頼

御側へ出勤今日より被召出勇と改名十二才^{実十四}

とある早川田蔵、改名して勇が紀成である⁽³⁾。そして木村高敦は、後述するがおそらく門主の身近に仕える近習の一人である。

桂園派の形成、展開に、佛光寺・佛光寺派が密接に関与していたと、これだけの事例に基づいて言えないのはもちろんのことであるが、少なくとも、桂園派の幸文や直好といった高弟をふくめた歌人たちと佛光寺派の僧俗の交流・交差の様子をうかがうことのできる資料ではある。そうした佛光寺派の僧俗にとつて、桂園派との交渉が一度きりで終わることもあったかもしれないし、くりかえされることも、そしてさらに一步すすんで、景樹なりそのほかの桂園派歌人なりに入門することもあったであろう。ここでいう「交差」とは、佛光寺派の僧俗あるいはその関係者が、景樹や桂園派歌人に入門し、佛光寺派と桂園派が、いわば重なりあうことをいう。

景樹在世時の桂園派は、佛光寺派と密接に交流し交差していた。その一一の事例をあげるとは省略したいが、当時の佛光寺派門主随応上人やその弟応専連枝⁽⁴⁾が、たとえば次のようにその一座に加わることがあったことを見ると、桂園派と佛光寺派の関係の密接さは粗々推測できよう。文化三年（一八〇三）五月二十二日、二十三日の記事である。随応上人・応専連枝と景樹やその

周辺の歌人たちの親しさがよく表れていると思うので、長くなるが全文を引く。傍線を付した「仏光寺の君」が随応上人、「正行院殿」が応専連枝である。

二十二日 仏光寺の君此の里のわたりに出てましてひとみ遊びあるへううちくよき所おのれに見定めてよ同じくは明日こそはみさはりなき日にてなとあふせたふこはおのれも召し出てみこころゆくまで歌物語あそはしてんみかまへなるへし神楽岡のいたきなる神光院こそはうちわたしめて給ふへき所なめりと夕つかたその事いひにのほる斧木行敬幸文のみたりも涼みかてらにとてつきませり細き山路ゆくに白き花ありよく見ればふち袴なりいちしろくうちにほひて色さへことなれば皆めつめり

秋の露いまたおかねはそめやらてまた白妙の藤袴かな

あろしのせしけさよりいて帰らすとて門さしたれば何事も空しくて帰り下る

二十三日さはかりあらましう思ひ極めたる所俄にたかひにければ今はさしあてゝおのれか東塙亭にむかへ奉らん外とみにせんかたもなけれとこのおのれか家よ門のかはらはくつれ落ち庭草は生ひ繁りへたてのさゝ垣などもあればたれはのら犬ともはひり来てくそまりわたせりむとくに高くかまへたる家の西にさへむきたれは夕てる日やなかにかさしかへりてうつはりたる木ももえつへう火宅の中の火宅なりけりかゝる所に浄土の君ともあふかれ給ふ大とこをいれまつらんやまた人間の種ならぬ竹の園生の末葉をやいかてすゝしき所をとともめわたりて終に垂雲軒に入らせ給ふ辰の頃より夜中ちかきまであそはせ給ふけふは殊更にあつき日にて世に堪へかたけれと此の庵

は引かへさるかたにこゝろして物したれば世になき風も
折々ふきさひてみけしきことにはうはしうさうのふえ
とりいてゝ吹きならし給ふ御はらからの君正行院殿はひ
ちりきうちあはせ給へり夕日はなやかにさしたるに萩の
葉のさゝとうちさやめくを聞き給ひてまらうとの君
山かけのやとの萩原風吹けば秋かとたどる夕まぐれかな
打ちあひたる題ひとつ出たせとあふせらるゝに出し奉る
題 夏の山陰に蟬鳴き風吹く

日くらしに蟬の鳴くなる山陰は風のすゝしき所なりけり
苦しけになくなる蟬か夏山の木の下風はすゝしきものを

外に十首の組題を奉るそのうち五月雨晴といふ頭の題を
給ひて

(二行空白)

皆おのれか歌也御はらからの君の御歌をはしめ垂雲のあ
ろしの歌また此の岡辺につとひませる歌人にもよませて
そのかすいとあまたなれと外にしるしてこゝにはふく

二十二日、「此の里」すなわち景樹の住む岡崎あたりで、「み遊
び」にふさわしい所を手配するように、という随応上人の内意を
承け、「こは、おのれも召し出で、みこゝろゆくまで歌物語あ
そばしてんみかまへなるべし」と推察した景樹は、神楽岡の頂の
神光院をえらび、斧木・行敬・幸文同道で交渉に赴いた。ところ
が、主の禪師は不在、そうなると、景樹の東塙亭にお迎えするほ
かはない。が、その東塙亭は、壁は崩れ落ち庭草は生い繁り、隣
との隔ての垣も荒れはてて犬が入りこみ……といった惨状であ
る。このようなところに「浄土の君ともあふがれ給ふ大とこ」、
「人間の種ならぬ竹の園生の末葉」をお入れするわけにはいかな
い。結局斧木の垂雲軒にお入りいただいた。ここは風も涼しく、
上人はことのほか上機嫌で笙の笛を吹き鳴らされる。応専連枝は

筆策で合奏される。そして、「萩の葉のさゝとうちさやめくを聞
き給ひて」、

山かげのやどの萩原風吹けば秋かとたどる夕まぐれかな
とお詠みになった上人は、つづいて「打ちあひたる題ひとつ出だ
せ」と景樹に命じられ、当座の歌会がはじまった。

さて、ここに紹介する「香川景樹添削随応上人筆当座会記」は、
桂園派の歌人と随応上人、応専連枝をふくむ真宗佛光寺派の僧俗
との交流・交差がうかがわれる資料である。全文を翻刻し、一部
については写真掲げて紹介したい。なお、後に余録として景樹
の添削についての小考を付す。

一 書誌など

「随応上人筆当座会記」は私に付した仮称である。本資料(5)
は、実は随応上人の詠草のうちの一点であるが、あえてそのよう
な仮称を付した。理由については後述する。外題・内題ともにな
い。縦二八・〇糎、横二〇・五糎、共紙詠表紙。本文一四丁、一
面五行。二箇所を紙縫りで綴じている。内容は、ある年の「ふづ
きもち過る頃」、随応上人弟の応専連枝の住まいである安住台(6)
と本山佛光寺に仕える木村高行の家において二日つづいて催され
た二回の歌会の記録で、それが開催されるにいたった頼末と出詠
歌が記されている。そして、その本文とは異なる手で合点と添削
が施されている。本文の筆者は筆跡から随応上人と推定される。
随応上人は和歌を有栖川宮織仁親王に学んでおり(7)、その筆
跡は後に掲げる写真1・2のように、明らかに有栖川流の風を備
えている(8)。点者・添削者は筆跡からみて香川景樹である。
随応上人が当座会の頼末と出詠歌を書き記し、景樹の点・添削を
求めたものであろう。表紙を写真3、景樹の点、添削のある部分

を写真4と10として翻刻の後に掲げる。

景樹の合点や添削の跡のある本山仏光寺所蔵随応上人詠草には、豎詠草、横詠草、巻紙、紙片など様々の形態があるが、そのなかに仮綴じの冊子もあって、本資料はその一つといつてよい。

出詠歌のうち随応上人詠五首の上部にそれぞれ縦五糎余、横三糎ほどの紙片が貼付されている⁽⁹⁾のも、他の詠草と共通している。この紙片には「秋」「雑」など、家集を編む際にそれぞれの歌が入るべき部が記され⁽¹⁰⁾、多くの場合その「秋」「雑」などに長点のような点が付されている。

ただ、この「香川景樹添削随応上人筆当座会記」には、それらの詠草一般と異なるところがある。これを書写した冊子が一冊、別に存在することである。縦二二・〇糎、横一六・五糎。本文は罫紙七丁、罫線は薄茶色、白紙の表紙・裏表紙が付けられ、細く折りたたんだ紙片で仮綴じされている。題はない。書写者は筆跡から応専連枝と推測される⁽¹¹⁾。後に示すように、景樹の添削にほぼ忠実にしたがって書写され、また本資料に欠けている歌が補われているなど、仮綴じ詠草の段階の本資料を当座会の記録として完成させたものと見なすことができる。言い換えるなら、本資料はその当座会記の原型ということになる。そこで、ここではその詠草一般と異なる面に則して、前記のように呼ぶことにした。

二 香川景樹「歌日記」文政四年七月二十日

この当座会については、景樹の「歌日記」文化四年七月に記事がある。

廿日昨日仏光のみとのにまうのほるへきをいささか暑け
のなやみにさはりてえまゐり侍らさりしをあかぬことに

思しめして今日近きわたりなる木村高敦の家に入まして
めされたるそいとかしこきもとより打ふしたるにも侍ら
ねはいそきまゐる当座もよほされて御題たまはる

猿

うつせみの人とかはらて山さるの子を思ふ様そあはれなりける
降来ぬる雨もわひしき山陰にさけふましろの声そ聞ゆる

秋祝言

秋されは沢田に余るやま水の豊なる世にまかせてそすむ
年々にとしある秋の小山田のほに出て誰もよをや樂しむ

黄昏の頃かへらせ給ふを鴨河のほとりまでおくり奉りて
いたつらに送て君をかへさめや月のいつへき夕なりせは

二日にわたって二回催された歌会のうち、景樹が実際に出席した二日めの歌会の、景樹の側からの記録である。本資料ではふれられていないことが、この「歌日記」によってわかることもあるし、本資料の記すところと食い違ふところもある。まず、「歌日記」によってわかることをあげるなら、本資料では「ふづきのもち過る頃」とあるのみの開催日が、「歌日記」には文化四年（一八〇七）七月十九日、二十日とある。また、小さなことではあるが、本資料では「此頃いささか病みぬとて」とある景樹の病が「暑けのなやみ」であることも、「歌日記」によってわかる。

次に、両者の間に食い違いの一つ目は、本資料では「わか家の子木村高行のいほ」とある二日目の当座の場所が、「歌日記」では「木村高敦の家」となっていることである。これは、一方が正しく他方は誤りなのではなく、上人にとっては高行の家であり景樹にとっては高敦の家だったということであろう。後述のように、文化四年当時、二人とも本山仏光寺に出仕していたが、高敦は後に他家の養子になっているので、高行のほうが年長で本山仏光寺の「家の子」の家である木村家を代表していたと推測される。いっぽう「歌日記」

に高敦はしばしば登場して歌を詠み、景樹に近しい人物であったのに対して、高行の名は一度も見えない。景樹にとってこの度の当座の場所が高行ではなく高敦の家と見なされたのであろう。

食い違いの二つ目は、二十日の歌会の景樹の歌が、本資料では一首であるが「歌日記」では二首ずつ記録されていることである。実は二首詠み、よりよい歌を提出したのであるが、これは、景樹だけのことでなく他の詠者も同様だったのではないかと推測させる事実である。出詠者は、分担することになった題について少なくとも二首詠んで、宗匠すなわち景樹の評価の高かったほうを出したのではないか。後の翻刻のとおり、本資料に見える随応上人の歌は歌会への出詠歌五首、それ以外の歌六首の計十一首であるが、出詠歌には一首も点がないのに対して、それ以外の六首は四首に長短二種類の点が付されている。これは出詠歌が、実はすでに点を得た歌であるからなのではないかと思う。

三 「当座会記」によってわかること

「歌日記」によって本資料からはわからないことがわかるのとは逆に、「歌日記」からはわからないことが、本資料によって判明する場合もある。その一つは、「ふつきのもち過る頃物よりかへりけるついでに正行院をとふらひける扱此日当座催さむとてかねて香川ぬしを契けるに」とあるように、景樹を宗匠として当座の歌会を催すことが前々から計画されていたこと等々、この二度の歌会が催されるにいたった事情と経緯である。「歌日記」には、十九日のことは、「佛光のみとのにまうのほるへきをいささか暑けのなやみにさはりてえまあり侍らさりし」としか記されていないが、本資料によれば、安住台において景樹を宗匠とする歌会を開くことが計画されていた。しかし、景樹の病により、出詠者は随応上

人、応専連枝をはじめとして佛光寺に直接かわる人々のみの、いわば内輪の会になり、題も安住台の主である応専連枝が十五首の「与題」（組題）を出して、景樹不在のまま催されている。

また、「歌日記」にはなかった景樹以外の出詠者の名と歌が、本資料には掲げられている。そして二十日の会は、「歌日記」は単に「当座もよほされて」というのみであるが、本資料によれば、本山佛光寺に仕える僧俗のほか、桂園のいわば双壁である熊谷直好、木下幸文が出詠し、さらに、先に引いた文化三年五月二十三日の記事にもあった「垂雲のあるじ」の斧木、「此の岡辺につどひませる歌人」である小泉重見、青木行敬なども加わった、やや盛大なものであったこともわかる。

十九日に予定されていたのも実はこのような会で、景樹不参のため繰り延べになったのかもしれないが、いずれにせよ重要なのは門主である随応上人の主導により、こうした桂園派の歌会が催され、題も十九日は臨時のこととはいえ明らかに景樹ではなく応専連枝が出していることである。これは、景樹の門人が自立して歌会を催すということを意味する⁽¹²⁾。景樹以外の人物を「宗匠」「よしあしきゝわく人」にすることができないのが、まだ完全に自立しているとはいいがたいところであるし、会の催しを主導したのも題を出したのも随応上人であり応専連枝であったとはいえ、それは開催場所の主であることや社会的身分の高さによるところであって、歌人としての自立を意味するものではないかもしれない。しかし、それにしても本資料には、こうした偶然や社会的身分の類に影響されたり支配されたりしながら、桂園派の歌会が景樹自身からある程度離れたところで成立していく様が描き出されており、その点で桂園派の展開の一過程が具体的に記しとどめられている興味深い資料と言えよう。

四 「当座会記」の出詠者たち

十九日・二十日の歌題・詠者、歌数は次のとおりである。歌題・詠者は所出順に番号をつける。◆は本資料に記載を欠くため応專写本によったことを示す。歌数の項の名前の下に（応專写本）とあるのは、応專写本のみに歌・名が記載されている場合である。なお、十九日の5の詠者は「たみ」（字母「太見」）、7は「多美」であるが「たみ」に統一する。また二十日の詠者名は、「しむ乗」「道せい」のように漢字と仮名を交えて表記されているが、ここではすべて漢字とする。漢字を当てるにあたって、もともと漢字で表記されている応專写本を参照した。

〔十九日〕

1	月出山	真乗
2	残月	応專
3	朝霧	慧岳
4	夕露	高敦
5	秋風	たみ
6	鴈初来	応專
7	庭菊	たみ
8	紅葉	紀長
<hr/>		
9	深夜雨	◆義肇
10	海辺松	高敦
11	窓竹	紀長
12	山里	◆義肇
13	暮林鳥	慧岳
14	枕夢	真乗
15	秋述懷	景樹
<hr/>		
真乗（随応上人）	二首	応專
慧岳	二首	高敦
たみ	二首	紀長
義肇（応專写本）	二首	景樹

〔二十日〕

1	获似人来	真乗
2	初萩	幸文
3	蘭	応專
4	薄村々	道誓
5	槿未開	直好
6	露深	応專
7	虫	紀長
8	鹿交草花	行敬
9	秋夕	斧木
10	山月初昇	景静
11	海辺月	義肇
12	惜月	行敬
13	擣衣欲曙	真乗
14	紫菊	紀長
15	松蔦	応專
<hr/>		
16	忍恋	◆直好
17	不逢恋	重見
18	久恋	◆直好
19	寄秋風恋	行敬
20	寄秋露恋	慧岳
21	寄涙恋	高敦
22	寄心恋	斧木
23	寄身恋	幸文
24	閑雞	重見
25	名所橋	慧岳
26	風破旅夢	幸文
27	猿	景樹
28	山家	真乗
29	秋懷旧	義肇
30	槐祝言	景樹
<hr/>		
真乗	三首	幸文
応專	三首	道誓
直好（応專写本）	三首	紀長
行敬	三首	斧木
景静	一首	義肇
重見	二首	慧岳
高敦	一首	景樹

二十日の21「寄涙恋」の詠者名を「高敦」としたが、妥当か否か検討を要する。原本は「たか敦」で、「高敦」であることに疑問の余地はないが、応專写本では「幸文」となっている。「幸文」

は「たかふみ」と読む。したがって、「たか文」と書くようにして「たか」と書き、うつかり「敦」とつづけてしまったのかもしれない。つまり本資料の誤りかもしれない。また、応専連枝が「たか敦」の「たか」に注意をひかれて幸文と早合点し「幸文」と書いてしまった、つまり応専写本の誤写かもしれない。両方の可能性があるが、ここでは後者と判断する。理由はこれが幸文だとしたら、二十日の会に高敦の歌はないことになるが、随応上人が歌会を開くため岡崎に向くにさいして、後述のように「歌読み」であつた高敦を伴わないで帰してしまうのは不自然であるし、伴っていたとしたらその歌がないのは不自然だということである。

以下、景樹以外の出詠者たちにつき、「佛光寺派門主・連枝」、「本山佛光寺法中」、「本山佛光寺家中」、「歌人たち」、「未詳」の五つにわけて適宜説明を加える。「法中」は本山に仕える僧、「家中」は同じく本山に仕える家司、近習などの在俗の人である。

「佛光寺派門主・連枝」

真乗は随応上人の名である。安永三年（一七七四）、佛光寺派第二十二代門主順如上人の長男として誕生、天明八年（一七八八）、第二十三代門主就任、文政六年（一八二三）遷化、享年五十。『佛光寺辞典』⁽¹³⁾に、「上人は漢詩、和歌、絵画をよくし、歌人、画家等の文化人との交際も深かった。本山には、上人筆の和歌その他数多く保存されている」とある。歌人では伴蒿蹊、そして特に香川景樹に親しんだ。

応専は随応上人の弟、応専連枝である。安永七年、順如上人の二男として誕生、享和元年（一八一〇）に連枝となり正行院と称した。文政四年江戸に下向、下谷別院西徳寺の寺務を執っていたが、天保四（一八三三）年に、享年五十六で没した。文化六年（一八〇九）、応専連枝は景樹に対して、「法の道」を踏分けるに付けては「ことのはのこみちありては一筋ならであらぬちまたにも

行迷はんおそりなきにあらず。今よりこの道をば捨侍りなんと思ひ成ぬる」と歌道の放棄を宣言する⁽¹⁴⁾が、結局それは貫かれず終わった。江戸下向後も応専連枝は歌を詠みつづけ、夕陽館の菅沼斐雄、児山紀成など佛光寺有縁の桂園派歌人たちとの交流があつたことが、諸資料からうかがわれる。たとえば、菅沼斐雄の柳下清老あて十月二日付けの手紙から、連枝示寂の際、「津田・朝岡・児山等スベテ十六人」が出席して追善の会が催されたりしいことが知られる。「津田・朝岡・児山」は、いずれも桂園門下の津田于城、朝岡泰任、児山紀成である⁽¹⁵⁾。

「本山佛光寺法中」

慧岳は「恵岳」とも書く。本山佛光寺の御堂衆である。その伝は拙稿「柏原正寿尼と常楽寺恵岳―桂園派形成の一事例―」⁽¹⁶⁾に記した。景樹と親しく、「歌日記」に頻出する

義肇は真宗佛光寺派の学匠である。『佛光寺学匠寮の伝灯と史料』によれば、明和三年（一七六六）生、天保九年（一八三八）没、享年七十三、法名瑞華院、釈義肇、京都の西徳寺住職。天保三年、副講師に就任。後に講師に昇任したが年月日は未詳である。「略伝」の項には、「寛政十年九月四日大阪別院輪番、同十三年輪番退任。天明の大火の時（二十三歳）、聖徳太子像・法然上人像・善導大師像を持ち出し、それにより功賞を賜る」とある。

以上の経歴のうち、「同十三年輪番退任」が、この年以降「大阪別院輪番」を務めなかった、という意味で言われているなら、それは間違いではないかと思う。「大阪別院」とは、『佛光寺辞典』によれば、寺号光専寺、寛元二年（一二四四）、親鸞の直弟子嘉清により天王寺庄内百済野に建立された。その後正慶元（一三三二）年大坂船場（西成郡平野町）に移転、宝永元年（一七〇四）、第十九代門主随庸上人の子が住み、そのときから本山掛所になって船場御堂または平野御堂と称した。享保四年（二七一九）

はじめて留守居を置き、以来輪番制になった。「輪番」とは、「寺院には住職が置かれるが、別院にあつては、住職は門主の兼務となつてゐるので、輪番が置かれる」といった意味の役職である⁽¹⁷⁾。その大坂輪番を、義肇は寛政十三年に退任していたとしたら、次のような「歌日記」の記事の傍線部は景樹の思い違いであるのか、享和三年（一八〇三）、文化二年（一八〇五）、文化五年という年次の間違いということになる。

享和三年五月

晦日西徳寺義肇師みまもりを蒙りてとまり給ふ平野町なる御寺をとふらひ終日あそひぬ

文化二年九月二日・三日

平野の御堂にやとる（中略）あるし義肇法師催したてゝ当座し給ふ

文化五年五月三日

けふのあるし給ふは光専寺の義肇法師なり

しかし、『御日記』享和二年元日の「御寺中御礼」の記事に「西徳寺 当時大坂輪番中不参」とあり、文化二年、文化四年、文化六年の元日にも同趣旨の文言がある。「同十三年退任」が誤りではないとしたら、寛政十三年にいったん退任した後、翌享和元年にまた任じられたということなのであろう。いずれにせよ、この文化四年当時、義肇は原則として大阪にいたことになる。

その義肇の歌があるのは、何らかの事情があつて、大阪にいる義肇にわざわざ出詠を求めたためとも考えられる。十九日の歌が本資料では空白になっており、いつぼう二十日の歌は記されているのは、前もって義肇に示されていた題は「海辺月」「秋懷旧」のみであり、十九日は景樹不参による「あるじ」すなわち応専連枝の急遽の出題だったため、後に題が届けられたことによる、と

いった想像もなりたつ。二十日の題が実は十九日の安住台での会で用いられる予定だったが、景樹の不参で二十日に繰り延べになった、と想像するのである。またこの文化四年七月十九日、二十日の頃、義肇は上洛しており、十九日の歌が空白になっているのは別に何らかの事情があつたのかもしれない。『御日記』があれば何らかの手がかりが記されているかもしれないが、後述（注23）のように文化四年は二月十五日以降の記事はない。ともあれ、学僧西徳寺義肇は、先に引いた「歌日記」文化二年に、「あるじ義肇法師催したてゝ当座し給ふ」とあるように、一方では歌僧でもある。「義肇」はこの義肇と考えてまちがいないであらう。

〔本山佛光寺家中〕

高敦は前記のように本山佛光寺に仕える近習と推測される。『御日記』文化四年元日に、「御家中御礼 於御座間」として家中（本山に仕える在俗の人々）の名を列挙した中に、「木村貞之進」と「木村左近」と、二人の木村姓の人物がふくまれているが、この二人のうち木村左近が高敦と思われる。理由は次のとおりである。「歌日記」文化七年正月に、次のような記事がある。

廿一日仏光寺のみとのいつも十日のころまうのほりさ
てはしめての御つとひもよほさるに又ことしはおのれむ
ねふたくやまひありてさる御殿わたりの遠きにはえもの
し侍らねはさることも行はせ給はてやみにしをあかすお
ほしてけふしもかしこくもおのか庵近き木村某かやとに
入給ひてよひよせ給ひいさゝかその式めきて皆にも歌よ
ませ給ひしなり 御兼題

鶯声和琴

（二行空白）

百ちとりさへつる春の初こゑをなか来て鳴も珍らしき哉

すみれ つくくし なつな

都人早くなつさへからなつなみになるまでに春は成にき

すゝめのおやひなにえくはせんとするかた

汝か声を今も聞しる人あらはいかにかなしき心なるらん

ところ

長閑なるいつくはあれとこの殿に所えたりとみゆる春哉

佛光寺初会への景樹の不参を「あかず思し」て、この正月二十一日、「おのが庵近き木村某がやどに入給ひてよびよせ給ひ、いさゝかその式めきて皆にも歌よませ給ひしなり」というのが誰の行いなのか、明記されていないが、文意からみて随応上人以外には考えられない。

これと対応する記事が、佛光寺『御日記』では文化八年正月二十一日に出ている。

一 御所様 青蓮院宮様より 東山御廟所へ

御成被為在候 御供大藏卿

先より 木村貞之進^江御成

おそらく、『歌日記』が随応上人の木村某の宿への御成を文化七年としているのは誤りで、正しくは文化八年のことであつて⁽¹⁸⁾、『木村某』は『御日記』のいう木村貞之進その人ではないかと思われる。そうであるなら、木村貞之進の家は、「おのが庵」すなわち景樹の家に近いところにあることになる。それは本資料に、

岡崎のわたりにいきて歌よみ宗匠を招かは程ちかければは出き
まさむ何方へもかゆかむと打寄かたるにわか家の子木村高行
のいはは南をうけて風もよく通へりこれそよからむといふ物

あり

とある「木村高行のいは」にほかならないであろう。つまり、木村貞之進は木村高行である。そして高敦は本資料に高行とは別に詠者として登場しているから、高行と高敦は別人である。以前私は、「高敦は貞之進その人か、またはその一族であつた可能性が大きい」と記した⁽¹⁹⁾が、高敦が貞之進その人であるかもしれないという推測は誤りであつた。

したがって、高敦は貞之進ではなくもう一人の木村姓、左近と思われる。『御日記』によれば、木村左近は、次のように文化六年八月に吉川主税の養子になり、吉川左近と称した。

一 吉川主税養子義 木村左近 尤木村貞之進

両家より御伺「判読不能」無御差支御許容
被為有候事

『御日記』文化六年八月六日

『御日記』文化七年（一八一〇）正月十九日において、次のように「歌読」と言われている「左近」は、おそらくこの吉川左近、旧姓木村、名は高敦であろう。

一 御所様東山へ御廟参被遊候

青蓮院宮様^江年始御成被為在候

東山相済候^而香川長門介^江御成

御先番

青蓮院様へ 東山へ

内記

采女

御供

栄次郎

左近 勘解由
還御八ツ時
是ハ歌詠ニ付御召連。

〔歌人たち〕

景静は、小林景静であろう。「歌日記」には、文化四年（一八〇七）三月二十四日の黒谷上雲院における「式の会」の出席者の中に「小林景静」の名が見え、同年七月七日「七首を分かちてたむく」とある七夕七首の詠者として、景樹・直好・阿元・斧木・重明（重見）・行敬と並んで「景静」の名がある。また同年四月には、次のような景樹と景静の家族との交流も記されている。

三日南隣なる小林景静ぬしのむすめ房子津の国平野といふ所に嫁になりて行ます高瀬より昼舟にのりて父の景静ぬしゐて行給ふなりけり立給へる跡に行てせの君の弘道ぬしなと酒くみかはしをみなともたちも名残恋しう入きて物の音たてつゝあなめてたなど打はやせとさうくしうかなしけにて母としは目ははれたるやうにて口にほき言のたまふも思ひやられたり限あれば皆あかれ帰りたるこよひタつかたより空のけしきかはりて夜ふくるまにくく雨風いとあらしとなりのかたいとさひしけなり

ぬ
雨の夜も風の吹く夜も聞きなれしその琴の音のこよひきこえぬ

摂津の平野には佛光寺の別院平野御堂光専寺があり、前述のように、当時この歌会の出席者でもある義肇が輪番としてあざかった。また有力門徒の奥野清順家があった。「弘道ぬし」がどのような人物なのか不明でもあり、現時点ではたんなる想像に過ぎないが、景静の娘房子の嫁入りにこうした佛光寺の人脈がかかわっていた可能性はある。いずれにせよ景静は「此の岡辺につどひ

ませる歌人」の一人である。

行敬は、「歌日記」にしばしば登場する青木行敬である。次のように文化二年（一八〇五）二月に岡崎に転居した。

四日青木行敬ぬしおのれにつきてうまく此の道まなはまくほりして都の家をひとりたちはなれわかあたりに物し給はんとてけふそ引きうつりましけるおほやけの事いとしけき身にしてかはかりこゝろさしをふかめ玉へることうれしとも嬉しかりけりさてよみてしめしける歌
思ふ事のみあり通ふ世中のみちの直路は此の道そかし
やかてまかきのかなたなれは近わたりの友とち打ちつと
ひ歌よむさけかひてのませ給へりゑひのまきれに庭の権
を見て

ことしまて朝顔のみは残りけりうつろひやすき人心かな

『平安人物志』文政五年（一八二二）版の和歌の部に、宗岡行敬、高倉丸太町南住、俗称青木左兵衛尉として載っている⁽²⁰⁾。以下、国際日本文化研究センター「平安人物志短冊帖データベース」から「青木行敬」の略伝を引く。

歌人。姓は宗岡。通称青木左兵衛尉。京都の人官方召使青木中務大録宗岡行有の男高倉丸太町南に住し、父の跡を継ぎ天明八年正七位下に叙し右衛門大志に任ぜられ寛政七年従六位下同十一年左兵衛大尉享和七年従六位上に昇叙。文化四年病により辞任。文政四年落飾仏門に入る。没年未詳

三上景文編『地下家伝』によれば行有は養父、実父は青木行褒でその次男、従六位上への昇叙は享和二年（一八〇二）となっている⁽²¹⁾。また、兼清正徳氏の『木下幸文伝の研究』『桃沢夢宅

伝の研究』によれば、安永八年（一七七九）生、天保十二年（一八四一）没、享年六十三。文化三年七月、幸文が岸本方忠の家に移った後、その住まいだった朝三亭に入った²²。景静と同じく「此の岡辺につどひませる歌人」である。

重見は小泉重見である。『平安人物志』文化十年版、文政五年版、同十三年版の画家の部に出ており、国際日本文化研究センタ―「平安人物志短冊データベース」の略伝には次のようにある。

画家。別に三宅の姓がある。号は東岡、通称小泉鞆負。京都の人、上岡崎村に住し住吉御社務京館留主居役を勤めその傍ら画を描いた。歌は香川景樹の門に学んだことは文化三年頃の桂園社中人名控に出ていることによつて窺われる。文政十年十月廿七没黒谷瑞泉院に葬る。法名東岡意幽齋居士。

兼清正徳氏『桃沢夢宅伝の研究』そのほかによれば、宝暦五年（一七五五）生、文政十年（一八二七）年没、岡崎住、景樹の隣人で歌とともに絵をよくした。「歌日記」に頻出する。本資料と同じ文化四年に、重見が登場しかつ佛光寺にかかわる記事が見えるので掲げておく。「十八日」は四月十八日、「副応寺」は正しくは福応寺で、近江国神埼郡川並村の佛光寺派寺院である。

十八日丸山の左阿彌にて小泉ぬしの画かき給ふこは江州河並なる副応寺博聞法師のもよほしにて佛光寺の君のみはらから正行院の君もおはせりおのれは清水寺にまうてゝ夕つかたかしこへはきぬさて例の画にしたかひてかい捨たる更に歌ともなし

志摩多ひのこしそらしたる

あなめてたこれは蓬かしま蝦かさらに老たる姿ともなし

（後略）

直好は熊谷直好、幸文は木下幸文である。この文化四年七月、直好は二回目の上京で京都におり、「歌日記」によれば七日には景樹・小林景静・阿元・斧木・小泉重明・青木行敬とともに七夕七首の歌を詠み、八月八日には景樹・早川紀成・木村高敦・菊岡弘充とともに真如堂の花見に行っている。幸文は、この年の六月に、前年から住んでいた岡崎の家を出て樺木町に移り、景樹は「翅もがれたらんこゝちぞする。いとゞおこたれる道のいかにすきみがちにかなりもてゆかん」となげた。とはいえ、この七月十九日、二十日の当座会の約一ヶ月前の六月二十四日には、「直好ぬし阿元師と百首を分ちよみて幸文ぬしに点をこふ」とあるし、約一ヶ月後の八月二十二日、「安住台御当座直好 幸文二人のぬしもまゐりて」と、安住台の当座に景樹、直好、幸文が出席している。景樹と幸文は絶縁していたわけではない。

〔未詳〕

たみと紀長についてはよくわからない。たみは、管見に入つた本山佛光寺所蔵資料に名が見えるのは、現時点では本資料のみである。十九日、不参の景樹を呼びに随応上人が常楽寺恵岳を遣わしたのを見て、

思ふほど人には待といはねどもきませとのみも祈なり晝

と、一座の思いを代表して述べるような歌を詠んでいること、二十日の垂雲軒での歌会には参加していないことから、安住台に住み、連枝の身近にいた人物なのではないかと想像される。応専連枝の妻については、本山佛光寺所蔵『澁谷歴世略伝』系図に、「享和二年二月本多従四位隠岐守康恒女近子為母知宮養而娶」とある。この近子の別称たとえば雅名が、「たみ」だったのかもしれないし、あるいはそれとは別の、安住台の老女格の女性などだったのかもしれない。

紀長は、「歌日記」文化四年九月に次のように出ている。

十七日夜高敦 紀長 阿元たちと臨時によめる歌結
初花

朝毎にいまたあらしは寒けれと咲初めたる山さくらかな

(以下「閑居」「琴調」各一首略)

また、本山佛光寺所蔵和歌短冊のなかに、「紀長」と署名のある三枚の当座短冊が見られるが、紀長と佛光寺・佛光寺派との関係については未詳である。

五 当座会への出詠と出席

本資料には、歌会への出詠者の名が記載されている。応專写本と併せ見ると、全員の名がわかる。その点で、桂園派と佛光寺派の交流・交差を考える上できわめて興味深い資料である。しかし、注意しなければならないのは、出詠者すなわち出席者ではないということ、さらにこまかく言えば、出詠しているが出席はしていない場合があるということである。それが明らかなのは、十九日の景樹である。「けふはいたく悩るとてつゐにきまさす」と、結局不参であつたにもかかわらず、「秋述懷」の歌がある。どのような事情があつての事なのか、よくわからないが、次のような想像も成り立つであろう。

「歌日記」には、会が催されたこと自体が記録されていないが、この「秋述懷」の歌は、同じ文化四年の八月の、やや後のところに、

秋述懷

我がとの岡のかや原ほにもてゝ泣はかりなる夕暮のうさ

とある。このすぐ前には、次のように佛光寺にかかわる記事がある。「安住台」は応專連枝の住まい、「御門主」は随応上人である。

六日安住台御当座萩見のみつとひにて御門主も入り給ひ
たるに折ふし野分して雨はけし雨中萩といふを通題にて
よませらる

打はへて今日は終日ふる雨にぬれのみまさるあき萩の花
また林下幽閑といふ軸の題を給りて

道もなき林かくれの庵なれと木間よりこそ月はとひけれ
我庵は松のはやしの奥なれは風よりほかに音もきこえず

おそらく、景樹は「秋述懷」の題を示され、歌を詠み送った。しかし、景樹側の記録では、文化四年の安住台での歌会の歌というだけで、その月日は不明になり、この位置に付け足されたのではないかと想像される。

いずれにせよ、欠席者の歌がその旨を明記されることなく書き留められているということは、諸々の当座会の記録において、出詠者として名を連ね、あるいは歌が掲示されていても、実は出席してはいなかったという場合がほかにもあるのではないかと思われる事実であつて、ほかならぬ応專写本がその事例なのではないかと思われる。応專写本は前記のように随応上人の詠草を当座会記をして完成させたものと見なすことができるが、その応專写本に、一日目の、

深夜雨

小夜更てふりくる雨の音す也あすはにこ覧山の井の水

義肇

とある箇所、また、

山里

義肇

隠れすむかひはなけねと山里は人のとふこそ嬉しかりけれ

とある箇所が、随応上人詠草では、それぞれ「深夜雨」「山里」と題があるだけで、詠者、歌は記されていない。同じく二日目の、

忍恋

直好

奥山の朽木におふる忍草しのひてはてむ我そかなしき

久恋

直好

松の葉の色にや思ひ染つらむ久しくなれとかはらさり梟

とあるところが、随応上人詠草では「忍恋」「久恋」という題名が記されているのみである。

なぜ空白のまま残されたのか、断言はできない。しかし、一日目の義肇、二日目の直好は実は出席していなかった、題を送られ出詠を求められて詠み送ったが、義肇の歌と直好の二首は随応上人の筆録に間にあわなかった、というのはじゅうぶんにあり得ることであろう。そして、何事もなかったように名前と歌が書かれている者の中に、実は出席していなかったが題を送られ、詠み送った歌が筆録に間にあつた出詠者がいたということも、またじゅうぶんに考えられることであろう⁽²³⁾。

歌会の記録に名と歌を連ねられている出詠者たちが、実際に一堂に会していたとはかぎらない。このことは、歌人たちの交流を考えるに際して、じゅうぶんに注意しておく必要がある。しかしそのうえでなお、このように景樹を宗匠として随応上人によって催された歌会があり、その記録の中に、桂園派の歌人として名の

ある人々と並んで真宗佛光寺派の僧侶や門徒の名が見られるということは、桂園派と佛光寺派の密接な関係、交流と交差を確かめるうえで重要な事実であろう。前述のように、本資料は桂園派が形成され展開していく過程を具体的に垣間見させてくれるものであると思う。

「当座会記」翻刻

凡例

- 一、改行は原本にしたがい、各行の下に丁数とその裏表を示す。
- 一、漢字・仮名とも原則として新字体、現代通行の字体を用いる。
- 一、随応上人自身の訂正・補筆と思われる箇所は原則として訂正補筆後の形にしたがうが、例外として、「此の宿を立いて、野をみわたせは」の「ゝ」と「野」の間あたりの右に傍書された「は」(14才)はもとのままの形を示す。
- 一、景樹の添削は、文字の左に削除を示すミを付し、訂正は文字の右に本行の文字よりやや小さく書き入れるという形式をとっている。しかし、ここでは印刷の便のため、削除・訂正されている部分の右に破線による傍線……と(一)でくくった番号とを付し、後に一括して削除・訂正を示す。本文にない語句が書き加えられている場合は、挿入すべき箇所に・を付す。
- 一、添削の書き入れを景樹自身が訂正した部分が二箇所ある(3)・(32)。その場合は訂正された部分に傍線を付し、下に訂正後の形をミを付して示す。
- 一、随応上人の和歌のうち、いずれも出詠歌以外の四首に付されている点は、太めの傍線によって示す。やや長い点は二文字分、それよ

り短い点は一文字分の傍線とする。

- 一、応専連枝筆と推測される書写本（応専写本）と、添削後の本文との異同を掲げる。異同のある箇所を実線による傍線と「一」でくくった番号を付し、異同は後に一括して示す。「当座会記」にない語句・歌が書き加えられている場合は、挿入する箇所に◆を付す。
- 一、本資料では、「荻似人来」から「秋祝言」までの二日目の当座会の歌は、翻刻に粗々示すように題を上に掲げ、題の文字数により一文字分から三文字分ほどあけて上の句、次の行に上の句と同じ高さで下の句、その下に詠者名を記している。それに対して書写本は、まず題を掲げ、同じ行の下に詠者名、次の行に題より三、四文字分高く、歌を一行で書いているが、これについては異同として示すことはしない。
- 一、異同につき説明を要すると思われる場合は、*を付して当該の異同の後に記す。

翻刻

ふつきのもち過る頃物よりかへりけるついでに正行院をとふらひける扱此日当座催さむとてかねて香川ぬしを契けるに
此頃いさゝか病みぬとていてこすこの席に宗匠のあらぬこそ
本意なしとて態と常楽寺をつかはしけるをきゝて

ふ思ふほと人には待といはねともきませとのみも祈なり梟
けふはいたく悩るとてつみにきまさす・あるしこゝろみて
十五首の与題もていつおのくさくる

月出山

真乗

山の端に月の出たる時にこそすそのゝ虫も声すみにけれ

「1ウ

残月

応専

久方の雲のたえまにほのくゝとあり明の月の影を残れる

朝霧

慧岳

あけほの横雲はるゝ山の端に霧立わたる秋はきにけり

夕露

高敦

夕日さすすゝきかうれに置露はかけし玉とも見えにけるかな

秋風

たみ

すゝしくはあれとも秋の夕風は木すゑをわきて吹わたるらん

鴈初来

応専

秋かせにさそはれきぬる初かりのこゑさやかにも聞えけるかな

庭菊

多美

此きくのしら菊ならはかくはかり花のさかりを人しるらめや

紅葉

紀長

あし引の山辺の紅葉色めきてみにゆく頃になりけるかな

深夜雨

「3オ

◆◆◆◆◆

海辺松

高敦

としをへて磯へにたてる高松の梢はなみの底に見えつゝ

窓竹

紀長

日をいとひまとに植たる竹なれと月のかけのみさすはうれしき

山里

◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆

慧岳

ゆふ月の影さすかたのやま松のはやしにかへる村からすかな

枕夢

真乗

玉手箱まくらにまきしうたゝねにこし方の事いめにみし哉

秋述懷

景樹

我がとの岡のかやはらほにも◆てゝなくはかりなる夕くれのうさ

かくやり来て大方はおかしうあれとたゝ宗匠の

あらぬそこゝろ足はすよて思らく今宵は此亭にて

「4ウ

夜すからかたり合てあす・岡崎のわたりにいきて
 歌よみ宗匠を招かは程ちかければ出きま・む何方へもか
 ゆがむと打寄かたるにわか家の子木村高行のいほは・南を
 うけて風もよく通へりこれそよからむと・いふ物あり
 これかれいふうち亥すくれはしはしまとろみ給へと
 あるしの枕ふすまなととうてゝ

5オ

伏待の月のかけさへふけにけりいさ君ねませねてや語らん
 はらからわかれてよりはしめて此亭に寝ぬるよと

いひつゝ臥たりしはしと思ふうちかたはらよりはや
 暁ちかき鐘きこゆおきさせ給へとつく驚きて起い

5ウ

ふし所どころかはりてありつれと此宿ゆへや安くねにけり
 手洗ひ口そゝきて朝つとめしかれいゝなとすれは
 従者も揃ひぬとつくこの宿を立出てゝ残れる月の
 かけをふみつゝ仰きて

6オ

かはほりの群て飛かふ打みれは明かた近き空にさりける・
 野にかゝり・みわたせはむかふ山の半に一むら白くみえ
 けるを雲かけふりか・と従者のとひければ山霽の気ならん
 といらへて

久方の日の山の端にさし出て照さは頓て晴やわたらむ
 たかみちか庵にいたりて

6ウ

水そゝき塵をもすへぬ此宿はおのつからとて涼しかりける
 茶のみたはこなとたうへてしはしやすらふうち雨きほひ
 雷とゝろく御おやの驚きおはし給ふやいかにと思ひ
 出てゝ

なるかみの驚かしけり君います都のかたやいかゝあるらむ
 さて宗匠のもとへかたばらに侍るばらはへもてけふは
 やまひいかに此亭迄来り給はずやなといひやりけるに
 けふは大方にこゝろよしとてやかておはすしはし

7オ

物語し題をいたすおのくわかつ

荻似人來 ねやの戸を明てみたれは人ならて

7ウ

初萩 夜かせに荻のさわくなり覺 しむ乗
 あさなくおく白つゆはしけれと

蘭 まはらにみゆる秋はきの花 たか文
 ぬきすてゝたれか置けむ藤はかま

8オ

薄村々 風にほころひ露にぬれつゝ おう専
 むらくにみえしすゝきも打みたれ

槿未開 みちふみまとふ夕立の跡 道せい
 あさかほのはなよりさきにおきいてゝ

露深 見れは露こそ盛成けれ 直よし
 野へみれは咲みたれたるやちくさの

8ウ

虫 しほるゝ計露は置けり 応せむ
 野辺見れはすかたみえねといつこにも

鹿交草花 むしの声のみきこえけるかな のり長
 初尾はなほにいてゝなひく秋の野の

9オ

秋夕 ゆふへわひしと鹿そなくなる 行もり
 わか為になくとなけれときりくす

山月初昇 こゑのひまなき夕わひしも 斧ほく
 時しもあれゆふきりはれてあし曳の

海辺月 やまよりのほる月そすみゆく かけ静
 浪華津に家あしをれば秋の夜の

9ウ

惜月 つきに明石の浦もみるかな 義しやう
 あやにくにてりまさりつゝあし曳の

擣衣欲曙 山の端ちかくなれる月哉 ゆき敬
 うつきぬのかす多ければあきの夜も

10オ

紫菊 明かたちかくなりけるかな しむ乗
 菊のはいつこにもあれとむらさきは
 いとめつらしき色とみるかな 紀なか

松 蔦 常磐なるまつのこすゑもほふ蔦の
もみつる色に秋やしる覧 おう専
忍 恋 〠〠〠〠〠¹⁴ 〠〠〠〠¹⁵
不逢恋 いかにせむ逢をかきりとさためてし
久 恋 我玉のをのよわりけるかな しけ見¹⁶
〠〠〠〠〠¹⁷ 〠〠〠〠¹⁸
寄秋風恋 こぬ人をわかまちをれば秋かせの
常よりさむく吹わたるかな ゆき敬
寄秋露恋 うき人のつれなき秋のゆふへく
むすふ露さへねたくも有哉 ゑかく
寄涙恋 よもすから袖のみぬれて夢にさへ¹⁹
逢みぬことそ悲しかりける たか敦
寄心恋 さためなくおもふものからやかてその
ころはかりそ猶たのみなる 斧ほく
寄身恋 うちわひて思ひかへせはよのなかに
身より外なるあたなかりけり たか文
閑 雞 庭つとりなく成声にあふ坂の
せきの杉むらしらみ渡れり しけ見
名所橋 ふるさとをしたふなみたそみたれける
をたえの橋を打わたりつゝ 慧かく
風破旅夢 かくはかりあらし吹よのたひねにも
さすかみえつる夢のかなしさ たか文
猿 現身の人とかはらてやまさるの
こをおもふさまそ哀也ける かけき
山 家 あし曳のみやまの奥にすみぬれは²⁰
月日もなかく思ほゆるか 真しやう
秋懷旧 秋の野の尾はなかつゑの露までも

13 オ

12 ウ

12 オ

11 ウ

11 オ

10 ウ

穂祝言 むかしをしのふよすか也 鳧 きしやう
あきされは沢田にあまるやま水の
豊なる世に任てそすむ かけ樹²⁰
さて杯などとうてゝ興いまた半ならざるに
母君の御もとより御消息もてけふはしはし御神の²¹
音信もあればとみに帰へれなといと懇に仰ありければ²²
興あるをも打すてゝやかて此宿を立いてゝ野を²³
みわたせは山々に夕霧わたり道のへのくさ
むらに虫なく 応 専²⁴
近くみし栗田の山も夕霧の隔つる迄になりけるかな²⁵
秋の野ゝ気色見すてゝたらちねのみことかしこみ急ぐ道哉²⁶
いたつらにきみを送りてかへさめや月の出へき夕なりせは²⁷
景樹の添削 景 樹²⁸
(1) 長門介
(2) 置
(3) にわつらへりとて(て↓か)
(4) つとひ
(5) なき
(6) し
(7) さらに
(8) めり
(9) ひ
(10) いてこ
(11) さるあひたに

14 オ

13 ウ

14 ウ

- (12) ナシ
(13) ナシ
(14) たせり
(15) りてよむ
(16) ナシ
(17) か
(18) よしあしきゝわく人
(19) か
(20) ぬこゝちしてさらに
(21) はとくより
(22) ししひてもよはゝかのやめる人いかてか
(23) てこ
(24) ら
(25) ナシ
(26) か
(27) へ
(28) 即かの里にて
(29) ふ
- *添削のままで「南ふて風も」となるが、原本の「て」の字形が「く」に酷似しているためそのままにしたのではな
いかと推測される。応專写本「南ふく風も」。
- (30) にいらせ給へ
(31) 皆
(32) ひしろふほと夜も更ぬ（しろふ↓さたむる）
(33) いふに
(34) ナシ
(35) からなれ
(36) ナシ
(37) ナシ

- (38) ひ
(39) たうへて
(40) ナシ
(41) たり
(42) ナシ
(43) 空
(44) く成
(45) ナシ
(46) 哉
(47) て
- *随応上人の補筆の可能性があるが、字形から景樹筆と推測
した。なお、「山月初昇」の第二句「ゆふきりはれて」の
「て」も傍書であるが、字形から随応上人補筆と推測した。
- (48) ナシ
(49) な
(50) みないふ
(51) 家
(52) ゑ
(53)こそ
(54) れ
(55) ナシ
- *「景樹の添削について」一一五頁下段参照。
- (56) さて
(57) ほとに
(58) かみなる
(59) 君のうへ心もとなういかゝ
(60) と
(61) やりまゐらせて
(62) か

- (63) ナシ
(64) して
(65) ナシ
(66) こゝまでしたひ
(67) たれり
(68) ナシ
(69) ナシ
(70) 来ませりやかて
(71) して
(72) てり
(73) を
(74) あり
(75) ナシ
(76) さわき
(77) おとろくしかりし同しくは
(78) りなんことを
(79) たひ
(80) 何も
(81) ナシ
(82) かも河のほとりまで来りて

応專写本との異同

- 【1】言にいてゝ
【2】はかりは
【3】ナシ
【4】義肇
【5】小夜更てふりくる雨の音す也あすはにこ覧山の井の水
【6】義肇

- 【7】隠れすむかひはなけねと山里は人のとふこそ嬉しかりけれ
【8】い
【9】く
【10】不明
* 応專写本は文字の上に縹色の小紙片貼付。「せ」か。

- 【11】わ
【12】ナシ
【13】ナシ
【14】奥山の朽木におふる忍草しのひてはてむ我そかなしき
【15】直好
【16】松の葉の色にや思ひ染つらむ久しくなれとかはらさり梟
【17】直好
【18】幸文
【19】ナシ
【20】た
【21】く

* 詠草は「やかて此宿を立いてゝ野を」の「ゝ」と「野」の間あたりの右に、「は」を傍書している。随応上人の筆である。応專写本は「頓て立出く野を」。傍書の「は」を「く」と読み誤ったと推測される。

- 【22】二首の前後逆（「近くみし」後、「秋の野ゝ」前）
【23】ナシ

景樹の添削について

一 和歌の添削

本資料において、景樹の添削はその多くが地の文(散文の部分)に集中している。いっぽうの和歌は、全部で五十四首(随応上人詠十一首)⁽²⁴⁾のうち、添削が施されているのは仮名遣いの訂正されているもの一首をのぞくと三首のみである。そしてそれら三首はいずれも随応上人の歌である⁽²⁵⁾。つまり本資料において実質的に添削されているのは、随応上人によって作歌・作文された部分のみである。

また、添削されている三首は、一首が安住台に宿りしたおりの歌、二首が安住台から二日目の歌会になった木村高行の家への道すがらの歌である。つまり歌会への出詠歌ではない。随応上人の一日目の出詠歌は二首、二日目の出詠歌は三首であるが、これら五首に添削の跡はなく、それ以外の六首については半数に添削がほどこされているのである。

このような事態の原因として次のようなことが考えられる。まず、添削が施されているのが随応上人の作歌・作文のみであることは、前述のようにこれが随応上人の詠草の一つであり、随応上人が添削を求めて景樹に提出したものであることからみれば、当然といえば当然の事態である。

次の、添削が施されているのが出詠歌以外の歌で、出詠歌にはその跡がないのはなぜなのか、という問題については、よくわからない。偶然である可能性がないわけではない。出詠歌はたまたま添削する必要のない出来映えであったのかもしれない。しかし、もしそうではないとしたら、考えられるのは、出詠歌にはすでに景樹の手が入っているということである。出詠歌とそれ以外の歌の点の有無をめぐっては本論の第二節ですでに述べた。また、随応上人のものではないが、私の見た詠草⁽²⁶⁾のうちに、「明日の会」の「当座の歌」の添削を求めものがある。歌会における当座の歌の題が事前に担当者知らされ、歌が準備されており、その歌も実は師匠によって(ときにはその会の宗匠によって)添削さ

れている場合があるのである。本資料の二度の歌会の題は、どちらも前もって題を知らされていたと思われるような記述があるわけではなく、ことに一日目の会の題は、文面によるかぎり景樹の不参により随応上人によって急遽出題されたものと思えないが、実態はどうであったのか、一日目二日目のどちらの場合にしても不明と云わざるを得ない。

さて、歌についての添削は、次の三首で、いずれも右が詠み立て、左が添削後の形である。ここには示していないが、三首目の「水そゝき」の第五句については、「涼しかりけり」の左にやや小さな字で「清らけきかな」と書き添えられている。本文と同じ随応上人の筆である。随應上人は第五句第二案として「清らけきかな」を傍書して景樹に取捨をゆだね、景樹は第一案「涼しかりける」を撰んだ、ただし第四句「おのつからとて」を「おのつからこそ」と直したことにともない、「ける」を「けれ」とした、と推測される。

ふし所とところかはりてありつれと此宿ゆへや安くねにけり
ふし所とところかはりてありつれと宿からなれや安くねにけり

(6才)

かはほりの群て飛かふ打みれは明かた近き空にさりける
かはほりの群て飛かふ空みれは明かた近く成にける哉

(6才)

水そゝき塵をもすへぬ此宿はおのつからとて涼しかりける
水そゝき塵をもすぬ此宿はおのつからこそ涼しかりけれ

(7才)

これらの添削がなぜなされたのか、評言の書き入れはないので

未詳と言わざるを得ない。しかし、共通して言えるのは、添削後の形は詠み立ての形にくらべて歌の調子が伸びやかになつていくということである。一首目は、「此宿ゆゑや」が唱えにくい。また、「ありつれと」から「此宿ゆゑや」へのつづき柄が約まつていくように感じられる。「と」(ど)に加えて「ゆゑ」も因果関係を露わに表す語であること、「宿から」の意味は抽象的であるのに対して「此宿」は具体的な内容をもつ語であることなどの理由によるところであろうか。いずれにせよ「ふし所ところかはりてありつれと」という上句の悠揚迫らぬ語調、「安くねにけり」という結句の状況、単純明快な語調と合致していない。

二首目は「飛かふ打みれは」という本来有るべき「を」を省いたつづき柄が窮屈で、前後の句の語調・状況にあわない。また、詠み立てのままでは見る対象が「かはほりのむれて飛かふ」つまりは「かはほり」であるのに対して、添削では「空」になつていく。それにともなつて、詠み立てでは見いだされたのは「明かたちかき空」であるのに対して、添削では「明かたちかく」なつたということである。詠み立ては一首全体が具象の世界であるが、添削はそれを、「かはほりのむれて飛かふ空」という具象から、明け方が近いという抽象の世界へと転化しているのである。詠み立ての約まつた感じは具象の世界にとどまつていくことにも一因があるろう。もちろん具象にとどまることが常によくはないのではないし、約まつた感じが常に悪いでもない。この場合は、地に「残れる月のかけをふみつゝ」空を仰いで夜明けの近さを知る、いう歌の内容に、伸びやかな語調、具象から抽象への展開がふさわしいのである。

三首目は「おのつからとて涼しかりける」に伸びやかさがなく、歌の「水そゝき塵をもすゑぬ」「涼し」の語調・状況と合致していない。付け加えるなら、「おのつからとて」は例の見いだしがたい言い方であり、かつ「ける」という体言止めも文法上不適切

である。これもまた添削の理由であろう。

このように、三首に共通して言えるのは、語調・語勢が約まつており、安らかなあるいは伸びやかな感のある状況や、前後の語句の語調・語勢とそぐわない、ということである。

こうした語調、語勢と状況との一致・不一致、ある語句とその前後の語句の語調・語勢との一致・不一致のうち、前者について次のような景樹の言がある。

海辺月

鱸つるふねは浜辺にたゆたひて波にいてたる月のさやけさ波に出てたるの詞のひやかならずして手つゝ也よりて其景色うかひ侍らす唯しらへ方にて歌となり歌とならざる也此波に出てたると云ふ語調は何そ島台やうの物の造りものに波の上に月を拵へて出したるやう也

〔随聞随記〕「同じ人(西郷元命)の詠草に」(27)

旅宿風

あまりにも烈しかりける夜風にやとはかれともねられさりけり

かりけるのはひすき夜風はつゝまりたりよりてけしき浮はさるなり (同右)

本資料の添削は、一つにはこれらと同じ意味でなされたのではないかと思う。景樹のいう「景色」・「けしき」と、ここで曖昧に用いている「状況」とが同じなのかどうか心許ないが、一つの考えとして提示しておく。なお、西郷元命は宝暦七年(一七五七)生、信濃松本の人で桃沢夢宅の門人である(28)。「歌日記」では、文化十二年(一八一五)六月に、

西郷元命か詠草のおくに 命もて共にあそはん敷島のこと

と葉の林しける此世にと有しかへし

もとよりも遊びつくさんことの葉の林は広し花に紅葉に
月雪のひかりをまるとつむことはひなも都も命なりけり

また、翌文化十三年に、

松本人西郷氏六十賀 寄巖祝
いや高く経なん齢にくらふれば山の巖もさゝれなりけり

とある。先に引いた詠草への奥書がいつなされたものか未詳であるが、元命の年齢やこうした記事から見て、本資料の文化四年からそう遠くは隔たらないころである可能性は大きいと思う⁽²⁹⁾。

二 文章の添削

文章についての景樹の考えを記すものとして、もつともまとまっているのは、すくなくとも文化年間では『新学異見』（文化八年成立、同一二年刊行）の最終段であろう。直接には『新学』の次のような段⁽³⁰⁾への批判であるが、『新学』において同主旨の文言はこの後にも繰り返しみえる。

かく心得たる後には、後撰、拾遺の歌集、古今六帖、古き物語ぶみらをも見よ。かくて立ちかへり古事記・日本紀をよみ、続日本紀の宣命、延喜式の祝詞の巻などをよく見ば、歌のみかは、自ら古きさまの文をも綴らるべきなり。

これに対して景樹は次のように言う⁽³¹⁾。ここという「文」は、歌集の詞書、物語さらには宣命・祝詞もふくむ幅広いものであつ

て、本資料の地の文も「文」にふくまれる。

さて文は義^{コトワリ}を本とし。歌は感^{アハレ}を要とす。譬へは文は華也^{モハラ}歌は香也^{ニホヒ}。華は其容^{カタ}ち語るへく。香は其芳^{ニホヒ}り説得^{トコ}へからぬか如し。(中略)昔も今も文辞はたゞ義理^{コトワリ}の達^{トホ}らんのみを要とするを。(中略)さはさて歌と別^{タカ}ひて。思慮^{オモエンハカリ}を用ふへき事なきにしあらねは。時と事とに随ひて。おのつから体格あり。その体格は学ふへし。其学ふに意得あるへし。似せて似へからさる事など。概略^{オホカタ}は歌につきていへるか如し。

この部分の主旨は、次のようにまとめられよう。

①歌が「感」の表現を「要」（文章が文章として成立するために必要な条件）とするのに対して、文章は義の伝達を「本」（「要」と同意）とする。

②したがって、文章は文意が明瞭であることを「要」とする。

③文章は歌とは別の配慮を必要とするところがあるので、優れた文章には時と所に由来する「体格」が自ずから備わっている。

④その「体格」を学ぶために必要なことは、歌の場合と同じ（古人の「誠」に習う）で、『新学』がいうように）古代の文章に似せて書くこととしてはいけない。

添削に直接かわるのは①②の文意（「義」「義理」）、③の「体格」である。

本資料における地の文に対する添削は、後の校異一覧に示すようにきわめて多い。しかし、和歌の場合とおなじく評言はまったくないので、それらがなぜそのように直されねばならなかったのかは明らかではない。ただ、随応上人の文章が、文意不明瞭とは見えないことは明らかであるし、添削によって原文よりも文意が明瞭になったと思われる箇所もない。例外は、末尾に置かれてい

いたつらにきみを送りてかへさめや月の出へき夕なりせは

という歌が、直前の応専連枝の「近く見し」、随応上人の「秋の野々」の歌と内容がそぐわず、どの時点で詠まれたものなのかわからないということであろう。景樹はこの前に、「かも河のほとりまで来りて」と書き加えている。これが唯一の例外である。

したがって、景樹の添削はほとんどが③にかかわっているのではないかと推測される。しかし、歌と違って思慮を用いなければならぬという、その思慮とは何なのか、また文の「体格」とは何なのか、よくわからない。参考になりそうな資料に、本資料よりもかなり後のもの⁽³²⁾であるが、次のような詠草奥書がある。

歌に歌格あれは文に文の法あらんはいはんも更なりさる中に歌はよみ得かたく文は作りやすきも又論なしされは歌をよみうるときは文作るわさはその中にあり (中略) さはさて何の上の調を得んも唯々歌の外にはあらさりけらし

〔『随聞随記』「信州今井信古かもとへ」〕

これによるなら、「文の法」と言い換えてよく、その「文の法」とは要するに「調」ということのようにも思われる。「体格」を学ぶためには心得があつて、その心得は「似せて似へからさる事など。概略は歌につきていへるか如し」とあることからそう考えられる。

内山真弓編『歌学提要』(天保十四年(一八四三)序、嘉永三年(一八五〇)刊)にも、おそらく『新学異見』の先に引いた「さて文は」云々をふまえた次のような一節がある⁽³³⁾。

文詞は昔も今も只義理の達らんのみを要とす。大概歌詞にかはることなし。(中略) されとも歌とたかひて。思慮を用

ふへき事なきにしもあらねは。時と事とに随ひておのづから体格あらん。その体格は学ふもあしからし。其学ふに。意得有へし。そは詠歌の総論に。引合せ見るへし

〔『歌学提要』「文詞」〕

傍線部のあることが『新学異見』との相違であるが、「文詞」も「歌詞」も「義理」が明瞭であることを要するという点では同じだという考えが、必ずしも景樹の本意に背くものではないことは、次のような詠草奥書から推測できる。

すへて御歌の心きこえかね侍り何分聞えずしてはやくに立ちかたきこと也いかにうるはしき事にてもいかによきことにてもその訳きこえずしては誠にいはぬも同じことに侍るへし

〔『随聞随記』「白木重樹か詠草の奥に」〕

此たひの二巻もとかく聞えくるしき事同じやうに侍りこれはいかに申入候ても平言と歌詠はかりたることもとよりなれはこればかりのおもむきはいはねはならぬと思ひ入給ふ故なりそれもさることなれとまつ平語のことく其すち人の耳に聞えたる上にてこそおもむきも風情ももてつくへきことに侍れ

(同「又おなし人(白木重樹)へ」)

歌も文章も同じく基本はこのように文意が明瞭であることである。真心から発せられた言葉には、歌にせよ文にせよ調べがあつて、調べがあれば意味は自ずから明瞭である、というのが景樹の考えであろう。

しかし、歌とは別の配慮を必要とするから(「歌と別ひて。思慮を用ふへき事なきにあらねは」)、文章には文章の「体格」がある、となると、歌の調とまったく同じというわけではな

い。つまり文章の「体格」とは何なのかよくわからない。

そこで、ここでは、私なりに次のような観点から、景樹の本資料の文章に対する添削について考えてみる。

一つ目は、仮名遣いである。景樹は、歴史的仮名遣いに反する箇所を歴史的仮名遣いに改めている。たとえば次のような例である。

(9) つゐにきまさす

つゐにいてこす

(38) かしい

かしい

二つ目は敬語で、たとえば次のような例である。

(1) かねて香川ぬしを契けるに

かねて長門介を契置けるに

(10) つゐにきまさす

つゐにいてこす

景樹への敬意を示す敬語が削除されている。

三つ目は、事実にかかわる添削である。

(11) けふはいたく悩るとてつゐにきまさすあるしこゝろみて十

五首の与題もていつ

けふはいたく悩めりとてつゐにいてこすあるあひたにある

し十五首の与題いたせり

原文では、「あるし」(主。応専連枝)が十五首の与題(組題)

を出したのは景樹の不参がはっきりしてからのことであるが、添削はその点を曖昧にしている。曖昧というよりも、むしろ、原文に示された事実を添削が改変するはずはない、などとしている考えないなら、「さるあひたに」は「景樹の返答、到着を待っている間に」という原文とは異なった意味に書き換えているととるのが自然であろう。

(4) 雲かけふりかと従者のとひければ山靄の気ならんといらへ

て

雲かけふりかなとみないふ

「雲かけふりか」は、原文では「従者」の問いの詞になっている。それに対して添削では、「みな」がいぶかしみ、あやしんで発した詞の要約になっている。従者の問いに随応上人が「山靄の気ならん」と答えて、さらに「久方の」朝日が出て照らされたらすぐに消えてしまふだろうと詠んだ。それに対して添削では、随応上人が「みな」を代表して答えを出した、ということになる。

以上、景樹の添削を、仮名遣い、敬語、事実という観点から分け、二三の事例を掲げた。これらのうち、仮名遣いについては二つの例をあげたが、ほかに歌について二カ所の直しがある(52・73)。景樹は歴史的仮名遣いを是としているようである。おそらく終生そうであった。ただし、完全に従っていたわけではなく、

「大方はおかしうあれと」(四ウ四行目)の「おかし」は歴史的仮名遣いでは「をかし」とあるべきであるが直していない。見落としてはなく、景樹は普通「おかし」と書き、門下もそれに倣っている(34)。ほかに「はらはへ」(童)、「ほふ」(這ふ)のような慣用的な表記も直していない。

次に敬語は、前記のように景樹に対する敬語が削除されていることが、まず目立つ点である。ほかに、

(23) 出きまさむ

出てこさらむ

という例がある。さらに次のような例も、尊敬表現の削除という点ではこれらと共通している。

(22) 宗匠

かのやめる人

(62) 宗匠

か

これらの「宗匠」は、本文三行目の「宗匠」(一オ三行目)や(18)

の宗匠（四ウ四行目）が、（18）に対する景樹の添削のように「よしあしきゝわく人」という、いわば役柄をあらわす言葉である（35）のに対して、香川先生、指導者である景樹といった意味で用いられている。

先に引いた『新学異見』の一節に、和歌と違って文章は「思慮オモヘカガリを用ふへき事なきにあらねは。時と事とに随ひて。おのつから体格あり」とあった。その「思慮」が具体的にはどのようなものであり「体格」とは何なのか、前記のとおり私にはよくわからないが、「思慮」の一つが尊敬表現にかかわるものではないかということは粗々見当がつく。景樹について敬語を削除するだけではなく、随応上人の母、知足院宮（36）について、

（61）御おやの驚きおはし給ふやいかと思ひ出てゝ

御おやの君のうへ心もとなういかゝと思ひやりまゐらせてのように、敬語の用い方を変える場合も「思慮」にあたるのではないかと思う。原文のままでは「驚きおはし給ふや」と知足院宮に対して敬意をはらっている随応上人の上位に、記述者として事実を平叙している随応上人が存在することになってしまう。ただ、それが「体格」とどうかかわるのか、そもそも「体格」とは何なのかがよくわからないのである。

ともあれ、しかし、注意すべきは、実は景樹への尊敬表現は単純に削除されているのではないということである。（22）の原文「宗匠」、添削の「か」の前後を引く。

あす岡崎のわたりにいきて歌よみ宗匠を招かは程ちかければ
出きまさむ

あすいとゝより岡崎のわたりにいきて歌よみししひてもよは
ゝかのやめる人いかてか出こむ

原文は、近いから出席する、といういわば物理的、具体的な理由がきわだっている。それに対して添削は、「いとゝより」「歌よみししひてもよはゝ」と、随応上人をはじめとする出席者が早朝

から歌を詠み、しいて呼ぶということ、つまり出席者たちの熱心が理由とされている。さらにいえば、添削は「やめる人」の一句を書き加えることによつて、その「やめる人」景樹は出席者の熱心さに病をおして応えてくれるという、和歌を媒介にした結びつきの強さに対する確信が表現されている。「宗匠」から「かのやめる人」への改変は、また「出きまさむ」から「いかて出こむ」への改変も、このような現実の物理的、具体的な状況から和歌による結びつきへの改変のなかでなされているのである。

その点は（62）でも同様である、というよりむしろいつそう明瞭である。

さて宗匠のもとへかたはらに侍るはらはへもてけふはやまひ
いかに此亭迄来り給はすやなといひやりけるにけふは大方に
こゝろよしとてやかておはす

さてかのもとへはらはへしてけふはいかにこゝまでしたひ来たれりなといひやりけるに大方こゝろよしとて来ませり
右の添削における「宗匠」から「か」への改変以外の改変をまとめると次のようになる。

① 「はらはへ」（童）の説明である「かたはらに侍る」を削除する。

② 「やまひ」という直接的な表現を削除する。

③ 「此亭迄来り給はすや」という直接的で命令ともとれる表現を削除し、かわりに自分たちが近くまで慕い来ったことを付加する。

④ 「けふは」「やかて」という説明を削除する。

いずれも具体的な要素の削除である。そして、「宗匠」から「か」への改変もその一環としてなされているとみなすこともできる。

「おはす」が「来ませり」と変えられているが削除されていないことも、景樹への尊敬表現を削除するということが主旨ではなかったことの表れではないかと思われる。

このような物理的、具体的な要素の削除は、実は本資料における文章に対する景樹の添削において、特に目立つことなのである。左に列挙する。↓がないのは全部が削除されていることを示す。数字は添削番号で、複数にわたる場合は最初のみを示す。

- (12) こゝろみて十五首の与題もていつ↓十五首の与題いたせり
 - (16) かくやり来て
 - (25) 何方へもかゆかむと打寄かたるに
 - (32) これかれいふうち亥すくれば↓いひさたむるほと夜も更ぬ
 - (36) 手洗ひ口そゝきて
 - (37) かれいゝ↓いひ
 - (39) 従者も揃ひぬとつく
 - (42) 仰きて
 - (48) むかふ
 - (56) 茶のみたはこなとたうへてしはし↓さらに
 - (70) やかておはすしはし物語し↓来ませりやかて
 - (81) 此宿を
 - (12) はこの例にあたるかどうか疑問もあるが、添削が「与題」(組題)を出したという事実を述べたものであるのに対して、原文は「こころみて……もていつ」とあるところに、応専連枝の行為がより強く感じられるように思つてここに掲げた。ほかに、事実の改変として先に掲げた、
 - (50) 雲かけふりかと従者のとひければ山靄の気ならんといらへて↓雲かけふりかなとみないふ
- も、この例とみなすことができる。また、母の知足院宮とのやりとりを記す部分のうち、
- (80) 興あるをも↓何も
- も具体性の削除という点では共通している。改められた直接の理由は、「興あるをも」には未練が感じられることではないかと思われるが、見捨てたのはどのようなものかという部分を削除

したことは、結果としては具体性の削除ということにもなる。

では、上述したような具体性の削除によって、何が変わったのであろうか。その変貌を一言でいうなら、和歌がいつそう重みをました、ということである。和歌に直接の關係のないことや、和歌によつてわかる具体的な出来事、状況は削除することによつて、和歌を中心とした記録であることがより明らかになった。少し言い方を変えると、歌会における事実の記述、書き留めから、随応上人をはじめとする「佛光寺派交流圏」の人々の和歌による交流の記録になった。応専写本は随応上人の出詠歌から上人の名を削除している。これが景樹の所為にしたがったことなのか応専連枝自身の考えなのか不明であるが、こうした添削の方向にそつたものと言えよう。歌に詠者名を記さないのはその人が別格の存在であつて、描かれた世界に遍在していることを示すことではあるが、事実の記録という観点からみれば記録性の欠如と言うべきである。言い換えると、具体的な事実を記さないことによつて、これが随応上人の主宰する世界であることを表現している、ということになる。

なお一つ、ここに書き添えておきたい。具体性の削除という点では、和歌の添削に見られた、「此宿」から「宿から」へ、「明かた近き空」から「明かた近くなる」へという、具象から抽象への添削の方向とも共通している。景樹は次のように、和歌は「有るがまま」ではなく「思うまま」をいうものだと言っている。

児山紀成か東に下りて仕官とゝのひし後都にのほりけるとき逢坂にて

あふ坂の関のしみつは清けれときてすむこゝろ我はなき哉

歌はかく有か俣をいふものに非す思ふまゝをよむへし同しなからも 逢坂のせきのしみつは清けれと来てすみかたく成に

ける哉かくよむもの也甘味すへしと論し給ひき

『随聞随記』『紀成か歌の評』

こうした考えと関係があるかもしれない。しかし、その関係の意味するところは、今はまだよくわからない。

注

(1) 彌富濱雄編『桂園遺稿』上巻・下巻（五車楼 明治四〇年三月・同八月。以下「歌日記」と略称する。引用にあたり漢字は現行の新字体、仮名も現行の字体に改める。

(2) 『佛光寺学匠寮の伝灯と史料』は、佛光寺学匠寮編、本山佛光寺平成一〇年一月刊。円雅と景樹との関係については、拙稿「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化六年まで―」（鳥取大学教育地域科学部紀要）（教育・人文科学）第五巻第一号 平成一五年五月）科学研究費補助金報告書『桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏』平成二〇年五月）に収録）に記した。

(3) 紀成と佛光寺との関係については、「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化六年まで―」（注2）に記した。

(4) 「連枝」は門主の兄弟の意。

(5) 以下、「本資料」と呼ぶのはこの「随応上人筆当座会記」である。

(6) 応専連枝が安住台に住んでいたことについては、「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで―」（『地域学論集』第一巻第一号 平成一六年一月）に記した。

(7) 芝葛盛・布施秀司・武田勝蔵編『織仁親王行実』（高松宮 昭和一三年六月）巻末に付された「歌道入門者一覧表」によれば、随応上人は寛政七年（一七九五）四月二十日に入門している。上人二十二歳である。

(8) 後の写真4と10との対比のため、比較的執筆時期の近い本山佛光寺所蔵文化六年香川景樹点随応上人詠草の写真を掲げる。

(9) 写真3・11参照。五首のうち一首についての紙片は破損して大部分が失われている。

(10) 随応上人には『自詠』と題する家集がある。現在見いだされているのは秋の部一冊、恋・雑の部一冊の二冊のみであるが、本資料において「秋」の紙片を貼付されている歌三首、「雑」の紙片を貼付されている歌一首は、紙片どおり秋の部、雑の部に収められ、紙片が失われている「山家」は雑の部に収められている。ほかに、紙片のない、「秋の野々気色見すてゝたらちねのみことかしこみ急く道哉」が、「岡崎の野にて」という詞書を付して雑の部に収められている。

(11) 以下「応専写本」と呼ぶ。第七丁裏を写真12、本山佛光寺所蔵応専詠草を写真13として掲げる。

(12) 二十日の会の題は誰が出したのか、よくわからない。「歌日記」には、「当座もよほされて御題たまはる」とあって、一見したところでは随応上人の出題のように見えるが、宗匠である景樹自身が出した題であっても分担する場合は主催者からいただいた、と表現する場合がある。先に引いた「歌日記」文化三年五月二十三日に、「外に十首の組題を奉るそのうち五月雨晴といふ頭の題を給ひて」とあるのがその一例である。

(13) 渋谷有教編『佛光寺辞典』（本山佛光寺 昭和五九年三月）

(14) 「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで―」（『地域学論集』第一巻第一号 平成一六年一月）

(15) 拙稿「柳下清老と真宗仏光寺派」『地域学論集』第三巻第三号 平成一九年三月）

(16) 『地域学論集』第四巻第二号（平成一九年一月）

(17) 『佛光寺辞典』の「佛光寺大阪別院」、「輪番」の項による。

(18) 「歌日記」文化七年の記事が実は文化八年のことを記したものであることは、正宗敦夫「桂園史料」が指摘しており、私も文化七年であったはずの花園公章の逝去が「歌日記」文化七年正月十六日に「こ

ぞしはす二日にかくれさせ給ひ」とされていること、文化八年正月の香川黄中の陸奥介辞任・落飾が「歌日記」では文化七年正月とされていることを指摘し、「歌日記」では同じく文化七年とされている『古今集』講義再開やこの随応上人の木村某の宿への御成も、『御日記』の記事を参照すると文化八年だったと思われることを述べた。

- (19) 「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで―」『地域学論集』第一巻第一号 平成一六年一月

- (20) 国際日本文化研究センター「平安人物志データベース」による。

- (21) 国文学研究資料館「地下家伝・芳賀人名辞典データベース」による。

- (22) 『木下幸文伝の研究』（風間書房 昭和四九年三月）、『桃沢夢宅伝の研究』（同 昭和五四年一月）

- (23) 佛光寺『御日記』に記載があれば少なくとも十九日の出席者は推定可能かもしれないが、文化四年は二月十四日の記事の後に、「相模公殿御日記此所迄付置被成候二付此末相知候事」とあって、十五日以降は欠けている。「相模介」は本山佛光寺家司小幡相模介徳義をさす。

- (24) 歌会への出詠歌四十五首（随応上人詠五首）、それ以外九首（随応上人詠六首）。

- (25) ちなみに、本資料一首目の「思ふほと人には待といはねとも」の歌は、応專写本では上句が「言にいてゝ思ふはかりはいはねとも」となっているが、誰によって直されたのか不明である。

- (26) 洛東遺芳館所蔵柏原正寿尼詠草。

- (27) 『随聞随記』の引用は、彌富濱雄編『桂園遺稿』下巻（五車楼 明治四〇年八月）による。

- (28) 國學院大學日本文化研究所編『和学者総覧』（汲古書院 平成二年三月）による。

- (29) このころより三十年ほど後、天保八年（一八三七）にも次のような例がある。

こゑとめてみれともみえず成にけり霞の末に靡く雁かね
声とめての詞みしかきゆゑ天外の雁を望めるやうになくさるに
次の句のひやかに候へは愈々打合あしく候声とめて尋ねくれと
も鈴虫の云々などのけしきめき候声さへに見やれともなと申
さては
（『随聞随記』「天保八年四月江戸社中点取」）
語調・語勢と「景色」との合致は遅くとも文化年間はじめ頃から晩
年まで、景樹の求めつづけたことの一つであった。

なお、語調・語勢と「景色」との一致・不一致の問題は、右の引用文の傍線部について、「さるに次の句のひやかに候へは愈々打合あしく候」とあるように、問題のある当の語句とその前後の語句との「打合」の良さ・悪さの問題として考えることもできる。内山真弓の『歌学提要』では、「物にふれ事につけて心の変化定りなければ。歌の態も又千変万化なるもの也。されとも強きはつよく。弱きはよわく。花やかなるは。花やかに。うれたきはうれたく。的情語脈貫通して。さらに強弱緩急打混するものには非ず」（『歌学提要・桂園記聞』（注33）による）と、調べの強弱緩急の問題としてより包括的に言っている。景樹自身の類似の言葉としては、神方升子の「色めきてちるは紅葉の常なるをころろかろしと風やおもはむ」という歌の初句を、「色に出て」と直して、次のように言っている例がある。

此一首にて申さは御よみたての色めきては一首の上のことわり
はよろしく候へともすへてのだからなる句調にあはせては一句
やせずほけ候てつりあひよからす候
（同じ人（神方升子）の詠草のおくに）

ただし、景樹がこの問題を、このように批評の現場で詞の打合という観点から論じはじめたのはいつ頃のことなのか、よくわからない。事例からみて文化年間よりかなり後のことのようにも思われるが、ここでは語調・語勢と状況（景色）との不一致、ある語句とその前後の語句の語調の一致・不一致（語句の打合の良さ・悪さ）の両方を交えて述べた。

(30) 佐佐木信綱編『日本歌学大系』第七卷（風間書房 昭和四七年八月）による。

(31) 文化十二年版本による。

(32) 今井信古は、兼清正徳『香川景樹』（吉川弘文館人物叢書 昭和四八年八月）によれば文政元年（一八一八）生、安政六年（一八五九）没。桂園入門は天保六年（二八三五）で、引用した文章は、本資料から少なくとも三十年ほど後に書かれたものと推測される。

(33) 築瀬一雄・田中仁編『歌学提要・桂園記聞』（昭和六三年一〇月 和泉書院）による。

(34) 景樹は、「おかし」（をかし）の語源を「おもむかし」（面向）と考えていた。『東塙亭塾中間書 三』「おかし」に次のようにある。

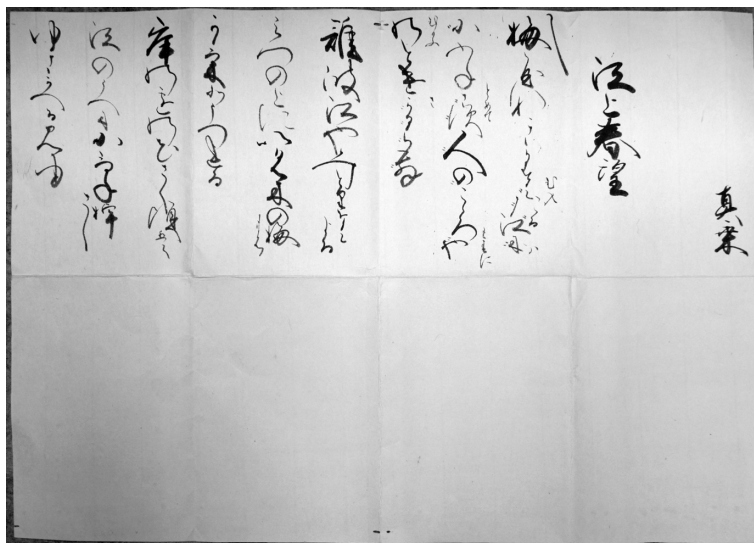
おかしの言はおむかしと云事也そむくの反也面向也おもしろき事には必面向しき也心に好まぬ事には背面する也今晒ふ事につきて云ふも嬉き事面白き事には必ず多み笑ふもの故に移りたる也
(35) (18) の「宗匠」については疑問が残るが、「宗匠のあらぬこそ」と敬語が用いられていないことからこう考えた。

(36) 『織仁親王行実』、『佛光寺辞典』によれば、有栖川宮職仁親王長男音仁親王女、知宮^{ふみ}経子。職仁親王実子となり、明和四年（一七六七）随応上人の父順如上人室。天明八年（一七八八）落飾、知足院の院号を得た。佛光寺入興後も、佛光寺内では「宮」と呼ばれている。

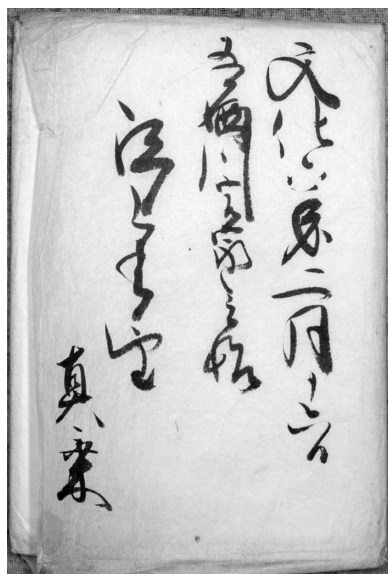
〔付記〕

資料の閲覧・掲載につき、澁谷恵照門主と御家族より格別の御厚意を賜った。記して深謝する。なお、本稿は平成二十五年^{（2013）}度科学研究費補助金（課題名「浄土真宗と和歌―佛光寺派と桂園派の関係を中心として―」、課題番号21520191）による研究成果の一部である。

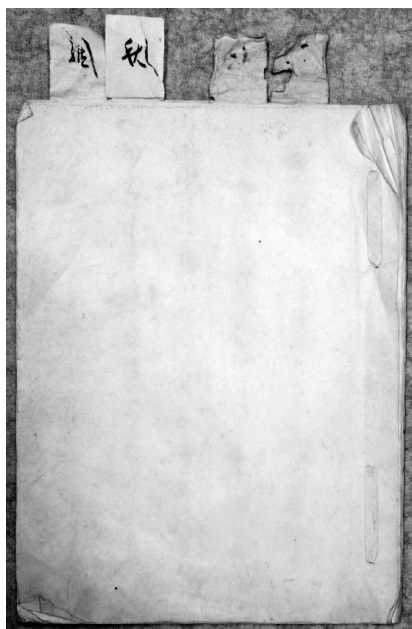
〔写真1〕随応上人詠草 文化六年二月十六日



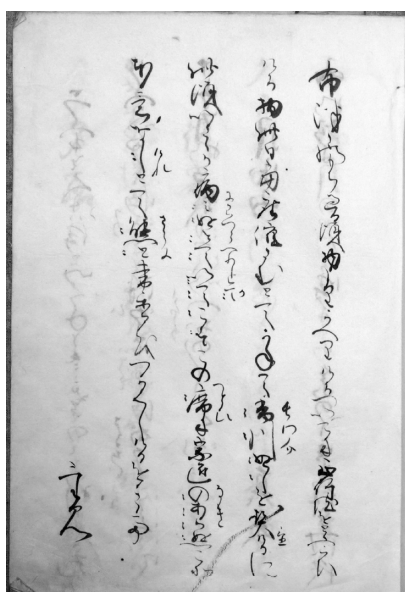
〔写真2〕 同包紙



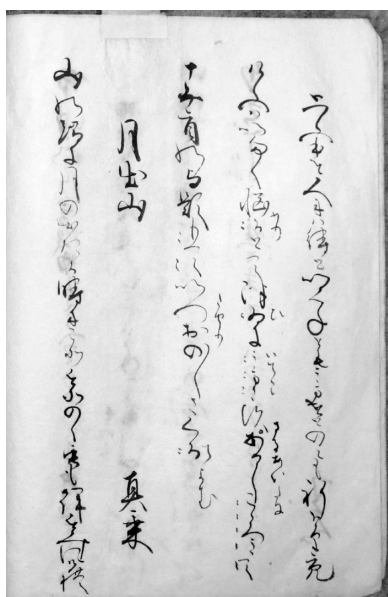
〔写真3〕 表紙・付箋

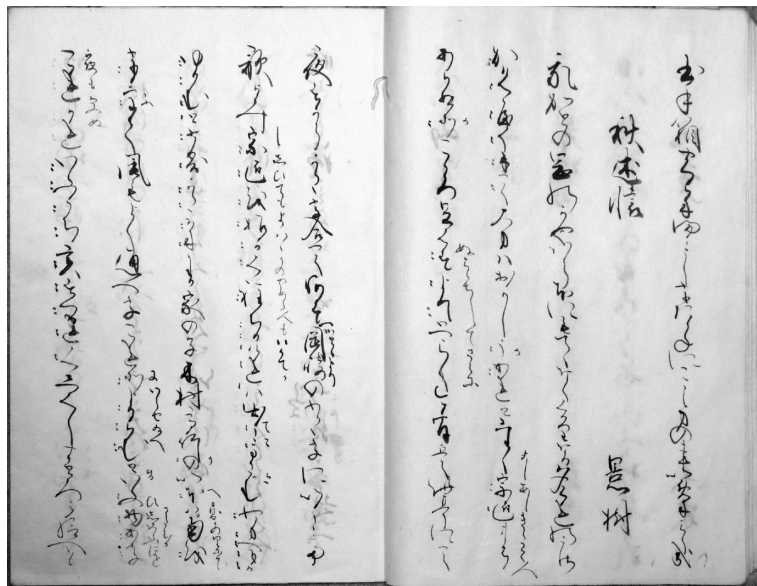


〔写真4〕 1丁表

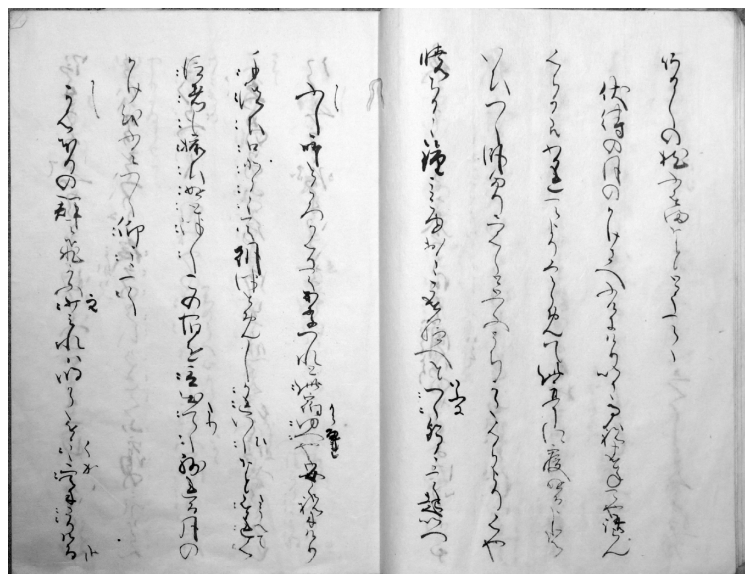


〔写真5〕 1丁裏

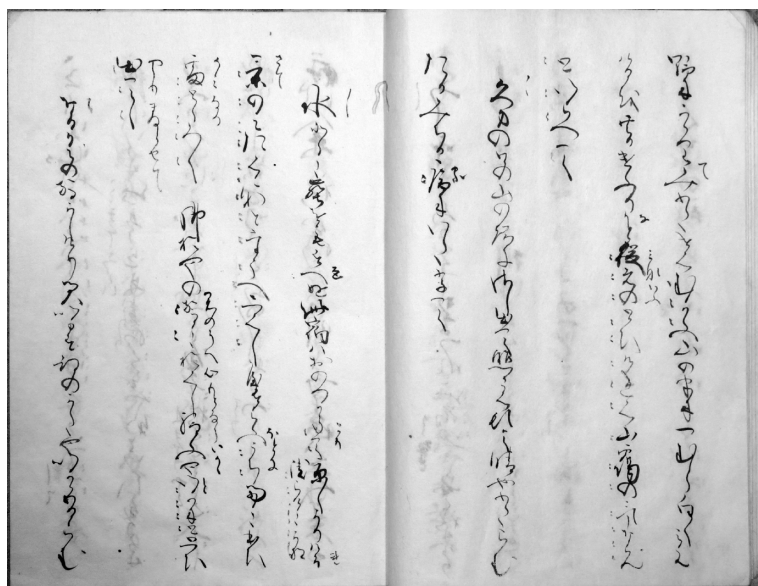




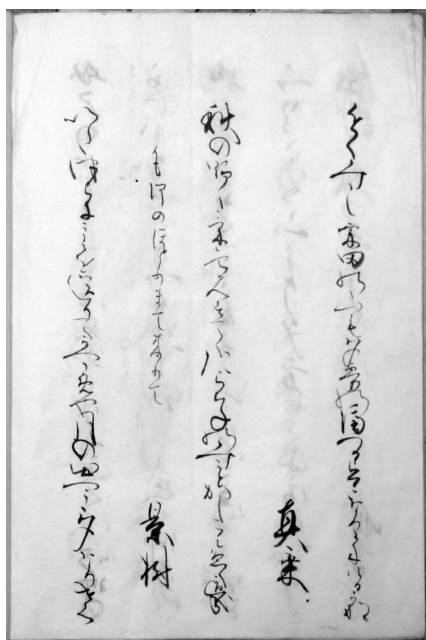
〔写真6〕 4丁裏・5丁表



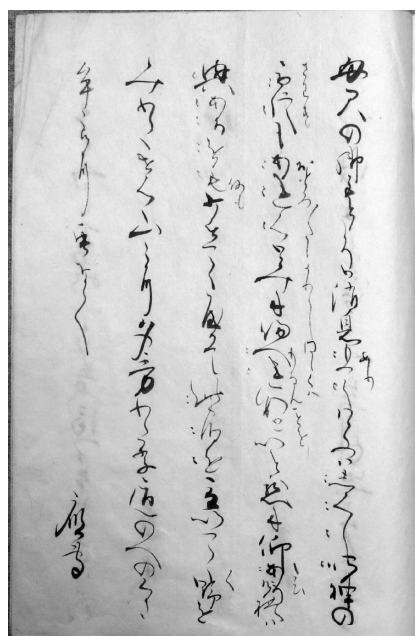
〔写真7〕 5丁裏・6丁表



〔写真8〕 6丁裏・7丁表

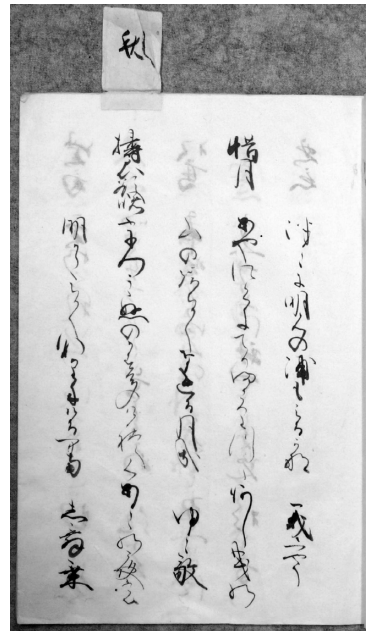


〔写真10〕 14丁裏

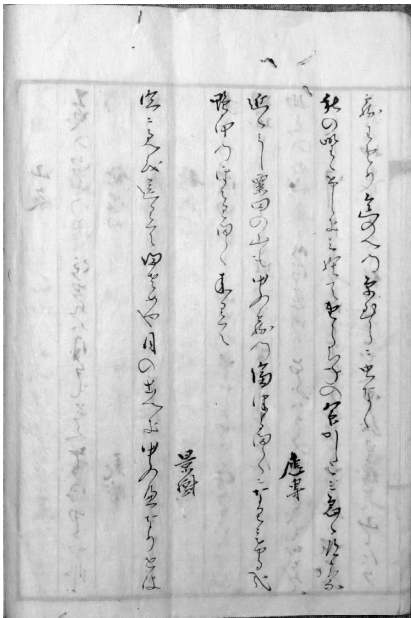


〔写真9〕 14丁表

〔写真11〕 10才・付箋



〔写真12〕 応專写本7丁裏



〔写真13〕 香川景樹点応專連枝詠草

